チャイルドエデュケア研究所

年報 16号 2018

2018年度テーマ

「子どもたちの探究心を育む教育・保育」

桜花学園大学・名古屋短期大学

チャイルドエデュケア研究所 年報 16号 2018

発行 桜花学園大学・名古屋短期大学
〒470-1193 愛知県豊明市栄町武侍48
名古屋短期大学　TEL.0562-97-1306 FAX.0562-98-1162
桜花学園大学　TEL.0562-97-5503 FAX.0562-98-1162
2019年3月31日発行

チャイルドエデュケア研究所機構図

目 的

- 地域の関係機関・団体と連携し、教育・保育、子育て支援等の研究・事業を推進する。
- 教育・保育専門職の養成・研修・継続教育に関する社会的要請に応える実践・研究・事業を推進する。
- 教育・保育に関する相談・支援、教育訓練・研修等を通して、大学の教育研究の成果を地域社会に還元するとともに、大学院生・学生等へ研究と学修の機会を提供する。
- 教育・保育に関する理論的・実践的な課題を、インクルーシブな観点をふまえ、グローバルかつ地域的な視点から研究し、教育・保育の社会的な充実発展に寄与する。

研修・事業部門

■ 教育・保育に関わる理論的・実践的な研究と研究会、交流会、公開講座等の開催

■ 教育・保育専門職の養成・研修・継続教育に関わる研究と事業

〈夏のセミナー〉
- 卒業生支援

〈冬の講演会〉
- 地域へのリカレント教育

■ 目的達成のために必要な事業

〈子育て支援室「さくらんぼ」の運営〉
- 子育て交流会
- 支援室開放
- さくらんぼ通信の発行
- 子育て講座・親子講座
- 学生ボランティアの参加

研究部門

■ 研究所年報等の刊行物の発行

■ 国内外の大学、研究機関、地方公共団体、関係団体との学術交流

■ 外部機関・団体との共同研究及びそれらの機関・団体からの委託研究

〈教育・保育・子育てにかかわる研究や実践報告〉

相談部門

■ 発達教育相談に関わる研究と事業及び教育訓練・研修等

★3つの部門で7つの事業を地域と連携しながら運営していきます。

目次

はじめに 【太田早津美】 2

§1 研究・実践報告

夢中になる保育 —国際教養こども学科の取り組み— 【石山英明　田端智美　寺田恭子】 3

音の探求心を育む 子どもへの「援助」について考える 【高須裕美　近藤真子】 5

障害のある子どもたちの主体を探求する動作法の実践 【小柳津和博】 7

米作りサークル「案山子」の初年度活動報告 【上原隆司】 9

子どもたちの探求心を育む教育・保育 —付属幼稚園の取り組みを通して考える— 【近藤正春】 11

§2 2018年度活動報告

2018年度第16回夏季保育セミナー（報告） 【堀　由里】 13

2018年度冬の講演会（報告） 【太田早津美】 17

§3 子育て交流会報告 21

編集後記

はじめに

平成30年4月に桜花学園大学・名古屋短期大学のチャイルドエデュケア研究所として組織改革をしてから1年が過ぎようとしております。当研究所は、教育・保育専門職の養成校として、地域の関係機関や団体と連携し、教育・保育の研究や研修及び地域の子育て支援事業を推進し、社会貢献を行うよう努力いたしております。

研究所年報16号は平成最後の年の発刊となりました。平成という時代を振り返りますと、平成2年の「1.57ショック」を契機に少子化傾向を課題として様々な子育て支援対策が打ち出されてきました。仕事と子育ての両立支援（ワークライフバランス）など子どもを生み育てやすい環境づくりに向けての対策の検討がなされています。

核家族化が進み、共働き家庭も多くなっている中で、父親の育児参加が少なく、母親の子育て負担が多くなり、子どもへの不適切なかかわりや虐待事件につながることも増えています。最近では働き方改革というキーワードもよく耳にするようになりました。こうした子育てをめぐる状況の中で、子育てを楽しみながらできるような環境づくりや、子育て家庭への支援の重要性を感じています。

当研究所の子育て支援室「さくらんぼ」では、子育て交流会や子育て講座を開催し年間約3500名の親子に参加していただいております。参加された皆さんは楽しそうにゆったりとお子さんと関わっておられ、リピーターも年々増えています。こうした子育て支援室「さくらんぼ」の取り組みが地域の子育て家庭の役に立てていれば幸いです。ママ友づくりにもぜひ活用してください。

さて、研究所の取り組みには、毎年、現場の保育関係者に向けた研修会があります。卒業後間もない保育士を対象とした夏季保育セミナーと近隣の幼稚園、保育所の幅広い年代の幼児教育・保育関係者を対象とした冬の講演会があります。今年度の夏のセミナーは、むすび座の皆さんに「こぶじっさの人形劇の上演と身近な素材を使ったパペットの演じ方」の研修をしていただきました。冬の講演会には、NHKテレビ「すくすく子育て」でもおなじみの、元白梅大学学長の汐見稔幸先生に「新保育所保育指針・幼稚園教育要領に沿った保育」について講演をしていただきました。子どもの育ちにおける非認知能力の大切さや、その力の育つ時期である乳児保育の重要性、人とのかかわりの大切さ、子どもの好奇心や主体性を育てる保育についてなど、明日からの保育に役立つ内容を分かりやすく話していただきました。年報に研修内容も掲載しておりますのでご覧ください。

また、年報には今年度の研究所テーマ「子どもの探求心を育む教育・保育」を踏まえた研究論文や実践報告を、桜花学園大学・名古屋短期大学・付属幼稚園の教員の皆様にご協力いただき掲載しております。ぜひ子育てや教育・保育実践の参考にしてください。

ますます、人との関係性の大切さや、家庭や地域社会の中で楽しく子育てのできる環境の整備が問われ、子育て支援の重要性が求められると思います。チャイルドエデュケア研究所は地域社会の要請に応えられるよう、地域の関係機関と連携し、教育・保育に関する研究や研修と子育て支援に力を入れていきたいと存じます。

皆様方のご支援とご協力をよろしくお願いいたします。

チャイルドエデュケア研究所長
太田早津美

夢中になる保育
ー国際教養こども学科の取り組みー

石山英明　田端智美　寺田恭子（保育学部 国際教養こども学科）
キーワード：保育、実習、海外の保育

はじめに

2018年度、桜花学園大学保育学部は国際教養こども学科を開設した。この学科は、グローバル時代の多文化共生社会に生きる子どもと保護者の支援と、それに必要とされる異文化受容能力、諸言語による高いコミュニケーション能力を備えた保育者・教育者育成を目指している。国内・海外の保育の学修により、日本とオーストラリアの保育士資格取得し、保育の国際比較を通してより望ましい保育のあり方についての学びを深めることが、学科開設の目的である。

1　国際教養こども学科の実習体系

国際教養こども学科の実習及び研修（以下、実習と示す）の体系は以下のとおりである。

年次	実習名	実習内容
1	海外保育フィールド・スタディ ※必修	ニュージーランドの 保育園（約2週間）
1	教育実習入門	幼稚園（1週間）
2	教育実習Ⅰ	幼稚園（2週間）
3	海外保育ライセンスプログラム ※必修	オーストラリアの 保育園（約7か月）
3	保育実習Ⅰ	保育所（2週間）
3	保育実習Ⅰ	施設（2週間）
4	保育実習Ⅱ	保育所（2週間）
4	保育実習Ⅲ	施設（2週間）
4	教育実習Ⅱ	幼稚園（2週間）

上記実習により、保育士資格、幼稚園教諭1種免許、オーストラリアの保育士資格であるCertificateⅢ in Early Childhood Education and Careが取得できる。

2　問題意識の所在

国際教養こども学科の学生が、次代を担う保育者として活躍できる学びの過程を確固たるものにしたい。そこで、1年生の必修科目である基礎演習Ⅰ・Ⅱの担当者である3人の教員は、学生の学びの進捗の把握に努め、きめ細かな指導を目指している。本年8月のニュージーランド（以下、NZと示す）での海外保育研修と、9月～11月にかけて行われた国内の幼稚園での教育実習入門で、学生たちは2か国の「子ども達と触れ合う機会」を得た。そこで、学生たちが学んだ事柄は、今後の実習等の学生による学びと、教員による指導の指標となるのではないかとの課題意識を持った。そこで、学生に主に実習に関連するアンケートを実施し、現状を明らかにしてみたい。アンケート実施日は11月22日の基礎演習授業であった。アンケート項目は以下のとおりである。

Ⅰ. あなたは，どの入試で入学しましたか．入学を決めた入試を１つ選んでください．
Ⅱ. あなたは，本学科が第一希望でしたか．
Ⅲ-①入学した動機を教えてください．
Ⅲ-②入学した頃に描いていた卒業後の自分の姿（将来像）を教えてください．
Ⅳ-①入学した頃の将来像と現在の将来像は変わりましたか．１つに〇をつけてください．
Ⅳ-②　Ⅳ-①の回答の理由をできるだけ詳しく書いてください（全員記入）．
Ⅴ. ニュージーランド研修前と研修後のあなたの気持ちや態度，行動などは変わりましたか．それぞれについて書いてください．
Ⅴ-①ニュージーランドに行く前の気持ちや態度あるいは行動について振り返り記入してください．
Ⅴ-②帰国後の気持ちや態度，行動について記入してください．
Ⅴ-③ニュージーランド研修はどうでしたか．
Ⅴ-④　Ⅴ-③で回答した理由を書いてください．
Ⅵ. 国内実習前と実習後のあなたの気持ちや態度，行動などは変わりましたか．それぞれについて書いてください．
Ⅵ-①国内実習に行く前の気持ちや態度あるいは行動について振り返り記入してください．
Ⅵ-②実習後の気持ちや態度，行動について記入してください．
Ⅵ-③国内実習はどうでしたか．
Ⅵ-④　Ⅵ-③で回答した理由を書いてください．
Ⅶ. 国外・国内両方の実習を通して感じたことはなんですか．自由に記述してください．
Ⅷ. 国外・国内両方の実習を経験して，今考えていること，あるいは将来について考えていることを自由に書いてください．
Ⅸ-①２つの実習を経験している中で，あなたが夢中になったことはありますか．どのような場面でも結構ですのでできるだけ詳しく書いてください．
Ⅸ-②２つの実習を経験している中で，子どもたちが夢中になっていたことを発見しましたか．どのような場面でも結構ですのでできるだけ詳しく書いてください．

アンケートの回収は44名であった。この内、今回は、Ⅸ－①及び②に関して、KJ法を用いて各教員が分析を行った。以下、その結果を示す。

3 アンケート結果及び分析

3-1 アンケート項目Ⅸ-①についての田端の分析

【表1】NZの実習で実習生自身が夢中になったこと　作表:田端

分類（NZ研修）	数値	割合
保育内容	14	27.4%
保育者の行動	10	19.6%
子どもとのふれあい	9	17.6%
語学	11	21.6%
子どもを観察すること	3	5.9%
その他	1	2.0%
無回答	3	5.9%
合計	51	100%

【表2】国内の実習で実習生自身が夢中になったこと　作表:田端

分類（教育実習入門）	数値	割合
保育内容	8	15.7%
保育者の行動	14	27.4%
子どもとのふれあい	12	23.5%
子どもを観察すること	3	5.9%
その他	1	2.0%
無回答	13	25.5%
合計	51	100%

NZと国内での「保育実習で学生が夢中になったこと」を質問した。学生の回答はNZが48（無回答3）、日本が38（無回答13）であった。学生にとってNZが初めての実習であることから、保育に興味が湧いたことを示すものだと考えられる。学生はNZの教育要領テファリキを学び、NZの保育内容についての知識を得ている。テファリキの学習において学生は、保育の記録の取り方やラーニングストーリー（個人の活動内容記録）や保育室の壁面の使い方（保育内容について掲示）等を理解している。NZにて学生はその実際を確認し、語学学修にも夢中になったようである。また、初めての海外渡航であった学生も多くいた。学生にとって３年次のオーストラリア保育留学に向けて英語力を伸ばすことは喫緊の課題との認識もあろう。

日本の実習では、保育者の行動について興味を持ったことが学生の回答から伺われた。NZでは、子どもと英語で話すことに精一杯で、保育者の行動まで目がいかなかったと考えられる。日本の実習で学生は、言語の壁を感じることなく保育者の移動や援助について、的を射て質問ができ、その意図が理解できた。日本の実習では1日の終わりに反省会があることで、保育者に質問しやすい状況がある。学生は実習生ながら、「先生」と呼ばれ、保育者としての自覚が生じている。両実習とも、学生には非常に有意義だったと考えられる。

3-2 アンケート項目Ⅸ-②についての寺田の分析

国外のコメント記入者26名（59.0%）、国内のコメント記入者27名（61.3%）、両者を混合し（どちらの子どもかは不明）記入した者12名（27.2%）、両方の子どもをそれぞれ分けて記入した者21名（47.7%）であった。一人を除き、皆それぞれに発見したことを国内外に偏ることなく列記しており、どちらかの子どもに対する強い印象の偏りは見られなかった。

こどもたちが夢中になっていることの内容をみると、遊び方の違いが学生により捉えられていた。NZでは「自分がやりたいことを一人で夢中になってやっているという姿」を挙げた学生が25%、国内では、ドッジボールなどの「ルールのある遊びに子どもが夢中になっている」と回答した学生が18%であった。その他、国内では限られた時間の中で与えられた課題（制作・お絵描き等）や、運動会の練習、ダンスの練習などに子どもたちが夢中になっている姿を発見した学生も数名おり、国内とNZの教育の在り方が、その違いに影響を与えていると考えられる。ただし、学生は各々の傾向に良し悪しの判断を下しているわけではなく、ほとんどの者が客観的な事実を記していた。ここから、さらに学生が学ぶことは多々あると考えられる。上記データ分析結果を示すことで、学生が保育・幼児教育のあり方を考える機会を与えていきたい。

最後に、学生は子どもたちがどんな遊びでも全力で遊んでいるという姿や事実をより実感したことが記述から推察できた。子どもたちの溢れるエネルギーが遊びに全力投球されている様子も、学生には大きな刺激となったようである。その体験を学生の今後の学びにどう活かせるかも、今後の課題の1つである。

おわりに

2ヶ国の実習から、学生が感じ取った事柄には共通点と相違点があった。善し悪しという軸ではなく、新たな価値観の構築には必要とされる事項と考える。

「子どもの探求心」を育むには、子どもが夢中になる姿を保育者がいかに捉えられるかが鍵になる。そして、それは保育者自身が保育に夢中になることと強い関連があり、またそれは世界共通であることは疑いないと、私たちは考えている。

我々は2つの実習を経た学生たちの表情に、自信と新たな目標を見据えるなどの変化が表れているように感じている。グローバル時代の保育・幼児教育に貢献できる人材育成を目的とする国際教養こども学科の取り組みを一層進めるため、教員も手を携えながら、継続的な研究を進めていきたい。

音の探究心を育む子どもへの「援助」について考える

高須裕美（名古屋短期大学　保育科）
近藤真子（オークランド大学　音楽学部）
キーワード：即興的な表現、母子コミュニケーション、足場かけ

1　子育て交流室を訪問する親子から学ぶ学生ら

筆者は、保育士資格を持つ専攻科2年の学生らと共に、保育子育て研究所の頃から10年間、子どもの音楽遊びと交流会などを年間数回、実施してきた。学生らは、保育のいろんなことを「知って」はいるが、ほんとうには「分かっていない」ということもあり、実践と教育の接点を子育て交流室で持つことで、支援室での活動は、学内で実践的な側面を補うことができる。そして、主体的な学習活動にも結びついている。とりわけ、子どもとの音楽実践活動においては、聴いたり観たりするだけでなく、子どもが触れたり参加したりできるような「子どもの探究心をさらに育むようなものでなければならない」ということを、計画の枠組みに設定している。

2016年度からは、学生が実践計画段階において、4～5回子育て交流室へ訪問し、実践題材に関わる絵本を読んだり、楽器を運び、どのような音遊びに興味を持つのか探りに行ったりしながら、子どもが安心する保護者と一緒に音を自由に奏でる姿を見たり、保護者の声に接したりしている。そのなかで、交流室に訪問する親子が、子どもをひざの上に乗せて一緒に歌う姿や、手遊びをしながら目と目で会話する姿から、「親子の音楽的なコミュニケーション」を観察したり、子どもが泣いたり甘えたりする姿、周りの子どもとの喧嘩を仲介したりする母親らの姿から「音を介して関わるやりとり」、「子どもの音楽的な行動」、そして「感情のやりとり」を間近に見せて頂いている。そういった側面においても、大学キャンパスの中に、親子、園児、学生、専門家が行き交う交流室があるキャンパス環境は、豊かで貴重なのだ。

2　母子の音楽的なコミュニケーションとは

この「親子の音楽的なコミュニケーション」とは、具体的にどのような行為を示しているのか。これは、互いに声を合わせて歌うだけでなく、親子のやりとりの中での交わされる、非言語的な交流も含まれている。つまり、母親と生後まもない乳児の頃から始められた音声や声のやりとり、母子の会話である。

マロックらは（2009）、このような乳児期の親子のやりとりを「コミュニカティヴ ミュージカリティ」(Communicative Musicality) と名称し、母子間のメロディのような、リズムのような、流れるような会話が、ある種の音楽性を持っているものであると提言した。また、ヤング（2005）は、親が優しく問いかけたり、子どもが抱っこされながら一緒に歌に合わせて揺れたり、歌を一緒に聴いてリズムをとったりする、そのような親子のやりとりの中にある物語を共感するような音楽的な経験の豊かさが、子どもの安心となり、その後の子どもの人生を支えるテンプレート（枠組み）になるのではないかということを考察している。教育学者である汐見（1996）は、感情とは、「ああいいな。やってみたいな」という意欲のもとになるものであると定義している。さらに、早期に理詰めで行動する訓練ばかりやっていると、感情を押し殺すようになるということを述べている。つまり、幼いうちに育てるべき音楽性とは、できる/できないという二分化した項目ではなく、日々の育ちから芽生える安心感と感情の豊かさということではないだろうか。音楽あそびの中で、このような発達はいったいどういういったものを指すのか、幼児期から表現力や創造力の育成を大切にするミシガン州オークランド大学Prep Schoolの乳幼児音楽実践を参考にしたい。

3　音楽性や表現力を育てる「足場かけ」とは

1）「時間と空間を共有」すること

人は胎内にいるとき、母親と「時間と空間を共有」し命がつながっている。生をうけ、身体的な世話をしてもらうことをとおして、感情の共有や非言語でのコミュニケーションが行われる。栄養だけ与えられ、人とのかかわり、特に触れ合うことを絶たれた子どもは、十分な感覚、運動、知能機能を発達させることができない。すなわち、幼児の健全な成長・発達にとって「時間と空間を共有」する質の高い関わりが大切なのだ。

母子の身体表現あそびの場面を例にあげてみよう。 母親が仰向けに寝て足をあげ（りんごの木）、子ども（りんご）がその足の上にのり、歌(Way Up High in the Apple Tree)にあわせて母子で動く。いつも親を見上げている子どもにとって上

から母親を見ることは新鮮でワクワクするような体験。落ちないか（落とさないか）親子共にドキドキしながら目を合わせる。「りんごの木がゆれるよ～」で子どもは母親の足の上で数回ゆさぶられ、「ダウン～」で母親の腕の中にスッポリ落ちていく。母親は「おいしい～」といってその子をギュッとハグする。笑顔の瞬間、教室は歓喜の声でパーっと明るくなる。こうした音楽あそびの中で、母子間で相互に作用し合う非言語による対話は、自然で喜びに満ちている。このような音楽を介しての「身体性の共有」「感動の共有」の体験が、子どものアイデンティティ発達の基礎を確立するばかりでなく、豊かな感性、表現力も育み、さらには人間形成へとつなげるのである。

2）子どもの中にある音楽を引き出す。

「教えるのではなく、育てる」ことを視点に考えてみよう。100人いれば100通りの音楽がある。大事なのは、その子の音楽にどれだけ気づくことができ、その子の感性や創造力を引き出しながら『子どもの中の音楽を育てる』ことではないだろうか。はじめから、音符を読むことや技術だけが優先で「教えられた」場合、自分らしさはかき消されてしまう可能性がある。そうなると、残念ながら「生きる力」を育むことはできない。では、子どもが本来持つ感受性や好奇心、創造力や表現力をどう育てればよいのだろうか？まず、子どもがそれらを発揮し自己を表現できる環境と、それらの能力を一緒に育くもうとする態度や能力を親や指導者がもつことが大切ではないだろうか。

スキャフォールディング（「足場かけ」ともいわれる）という概念がある。子どもが新しい能力を身につける際、養育者やより能力のある他者がおこなう、一時的、体系的な手助けや支援のことである。支援者は、今、その子がどういう状況にあるかを見極め、最良の環境を与え、子どものできないことを補い、発達を手助ける。必要最低限のサポートのみ与えることによってその子の学習意欲を促すことができるとされている。

4　「足場かけ」の実践例

これは、6歳児クラスでのジャズセッションと支援（「足場かけ」）の様子である。まず指導者がピアノで簡単なジャズコードを弾き、子ども達はそれに合わせて打楽器を打つ。指導者の音楽による支援により、子ども達は自然にジャズのリズムにのって身体全体て楽器を演奏する。次に、子どもが一人ずつピアノに向かい、指導者との音楽対話がはじまる。まず指導者がピアノで1、2小節語りかけ、子どもはそれにピアノで返事する。その反応を聞き逃さず、指導者は再び音楽で返す。そこに音楽によるコミュニケーションが生まれ、その子の音楽的アイディアがメロディとなって表現される。即興による音楽づくりである。母親や仲間は打楽器によるジャズのリズムでそれを支援する。この一連の非言語による対話や音楽的なかかわりの中での様々な「足場かけ」により、子ども達は、単に楽器を演奏するだけではなく、自分の出す「音」や表現方法に深い関心をもちはじめる。音の強弱や音色、楽器の奏法や表現の可能性を探ったり、音楽や仲間との絶妙なタイミングでのやりとり、音楽性や感性の共有をとおして、自己表現しながらコミュニケーション能力を育んでいく。音楽技術を教えてから表現力を伸ばすというのとは逆の発想で、子どもの中にある音楽を育てることの方が重要で、短い一瞬の表現にも子どもたちの無限の可能性が開かれるということを念頭に実践を続けている。我々は、本来音楽がもっている、自分にとっての温かさ、やさしさ、豊かな愛情を再確認し、子どもと音楽することの価値をさらに見直していきたい。なぜなら、声や楽器の技術的な側面は後から追いつくことができるが、豊かな表現力は、大人になってから磨くことが難しいからである。

文献

- Malloch,C., Trevarthen (2009) Communicative Musicality: Exploring the Basis of Human Companionship. Oxford University Press.
- Young, S. (2005). Musical communication between adults and young children. In D. Miell, R. Macdonald, & D. Hargreaves (Eds.), Musical communication (pp.281-299). Oxford, England: Oxford University Press.
- 汐見稔幸（1996）『かしこさってなあに―乳幼児期の知育を育てる』IUP

障害のある子どもたちの主体を探求する動作法の実践

小柳津和博（桜花学園大学　保育学部　保育学科）
キーワード：動作法、心理リハビリテイション、主体

1　動作法とは

「動作法（どうさほう）」という言葉を耳にしたことがあるだろうか。

動作法は心理リハビリテイションとも呼ばれ、1960年代に九州大学を中心に開発された心理療法である。もともとは脳性まひによる運動機能に障害のある方に対して動作の改善を目的とした支援技法として開発された。現在では肢体不自由だけなく、自閉スペクトラム症などの発達障害、うつ病などの精神疾患、高齢者の健康保持、スポーツ選手の競技力向上などにも有効であることが証明され、日本国内だけでなくアジアを中心とした海外でも活用されている。

成瀬（1995）は、動作を「意図―努力―身体運動」という一連の流れであると説明している。人の心の中で①動かそうとする思い（意図）を出発点として、②どうやって動かすとよいかという試行錯誤（努力）を通して、③表現される体の動き（身体運動）が「動作」であると考えられている。すなわち、動作そのものは心の活動による表現であるともいえる。また、動作には、「他動感、自動感、主動感」があるとされる。他動感から自動感、そして主動感に近づくほど、「自分の体を自分でコントロールできた」実感を伴うことができ、動作が成熟したと考えることができるのである。

10年以上動作法に携わってきた筆者から見て、動作法の一番の魅力は障害児者にとって体の動きを通した「主体を探求する活動」であることだと考える。

2　支援を必要とする方への動作法

支援を必要とする子ども達は、動作を適切に調整することが苦手な場合がある。例えば肢体不自由であれば、障害の状況によって自分の思う通りに体を動かすことが難しいということは想像にたやすいだろう。そこで、体の動きを通して正しい意図の仕方、正しい努力の仕方を学ぶことで適切な身体運動として動作を表現する学習を積み重ねるのである。学習の積み重ねにより自分で動かした感じ、すなわち主動感が高まり、主体的に自分の体を操作する感覚をつかむことができるようになると考える。

では、自閉スペクトラム症を主とする発達障害の場合はどうか。自閉スペクトラム症のある方は、障害の特性により、他動感（他者に動かされている感じ）や、自動感（自動で動いてしまう感じ）に影響されながら生活していることが多い。自閉症当事者である東田（2016）が自分自身の体について「どうやったら自分の思い通りに動くのか実感が無い」と具体的な感覚を述べている。そのような方にとって、動作法による学習（訓練）は自分の体に注意を向けながら適切な動きをコントロールする力を高めることにつながる。自分の体に注意を向け、自分の体を思い通りに自己調整する力を養うことで、豊かな生活を送るために必要な基盤を培うことになるのである。

3　動作法の具体的な効果

筆者は、前職である特別支援学校教員時代に動作法と出会った。そして、子どもたちの主体を高める自立活動の学習に対して、動作法の理論を活用することについて関心をもって取り組んできた。

特別支援学校では、障害による学習上・生活上の困難を主体的に改善・克服するための学習として、自立活動という学習の領域が設けられている。自立活動で大切にされているのは、子どもたちが主体となって学ぶ姿である。また、自立活動のいう「自立」とは一般的にいう親元を離れて生活する自立とは違い、「今よりも良い姿を求めること」であるとされている。子どもたちが自ら主体となって今よりも良い姿を探求するところに自立活動の学習のねらいがあるのだ。

ここでは、筆者が特別支援学校教員時代に動作法を活用して自立活動の学習を行った重度・重複障害児（主障害は脳性まひ）の事例を取り上げながら、動作法の具体的な効果について紹介をしたい（詳しくは特殊教育学研究53巻4号掲載論文をご覧いただきたい）。

（1）運動面の効果

肢体不自由を主とする重度・重複障害児にとって、動作法の効果として最も期待できることが運動面の変化である。私が担当した障害の重い子どもは、当初自分で動かすことができる体の部位はとても少ない状況であった。しかし、1年間の学習の成果として、1分以上あぐら座位の姿勢を保つことができるようになった。また、左右両方に寝返りができるようにもなった。

（2）認知面の効果

人の認知の発達は運動発達と密接に関連している。動作法を適用して運動発達を促すことによって、認知面の発達も促進

することができるのである。動作法で体を動かす際には動作という対象に子どもと支援者が互いに注意を向け、共有することになる。この注意の対象を共有する認知活動そのものが重要で、指差しなどに代表される「共同注意」と呼ばれるコミュニケーションの基礎的な力を育むことになるのである。

私が担当した障害の重い子どもは、動作法による学習を通して指差しだけでなく、提示・手渡し（「ちょうだい」→「どうぞ」など物を手渡すやり取り）ができるようになった。このことも動作法による効果の一部であると考えている。

（3）健康面の効果

動作法の中で座位や立位の姿勢を体験することは、障害の重い子ども達にとって適切な負荷の運動となる。私が担当した子どもの様子から、座位などの体を起こした姿勢を保つことができるようになるとともに、血中酸素飽和度（血液中に取り込む酸素の割合）の平均値が高まることが分かった。体を主体的に動かすことで呼吸状態などの健康面にも効果があることを子ども達から教えてもらったのである。

4　活動の実際

動作法は、主に障害児者の親の会が中心となって全国各地で実践されている。動作法では「トレーニー（支援を必要とする方）」、「トレーナー（動作法実施者）」、「スーパーバイザー（助言者）」が集まり、共に実践を通して学び合うのが特徴である。

愛知県内においても、5か所以上の地域で月に1回程度行う月例訓練会として活動が行われている。また、夏季・春季などには宿泊型で集中して行う研修会（動作法キャンプ）も全国各地で行われている。

ここからは、2018年8月に筆者がスーパーバイザーとして参加した集中宿泊型研修会（愛知心理療育キャンプ）の様子を紹介したい。

今年度の愛知心理療育キャンプは、8月18日（土）～23日（木）まで5泊6日の日程で蒲郡の宿泊施設を利用して実施された。参加者は17名のトレーニー（トレーニーの生活面を支えるために保護者もしくはボランティアが付き添って参加している）に対して、トレーナー・スーパーバイザー（特別支援学校教員、大学教員、福祉施設職員、学生など）約20名が参加した。参加されるトレーニーの障害種は、脳性まひ、自閉スペクトラム症、ダウン症、染色体異常など幅広く、障害の程度も軽度から重度の方まで様々であった。

動作法のキャンプでは、60分間の動作法を午前2回、午後1回の1日3回、6日間で合計15回程度行う。プログラムの中には、動作法の時間だけでなく、トレーニーが楽しめるような遊びを中心とした活動時間も組み込まれており、全員で楽しみながら体の動きを学習する場となっている。

私がスーパーバイザーとして参加した班では、座位姿勢でまっすぐな体の軸を見つけることに苦労しているトレーニーに対する支援方法について議論が深まった。直接の支援者であるトレーナーとのミーティングを繰り返しながら、トレーニー自身が体の軸をつかむことができるよう有効な支援策を探った。トレーニーは「こうかな」と自分の体の動かし方について主体的な探求を続けてくれた結果、日常生活動作が楽にできるようになったなどの成果が見られた。

動作法は支援を受ける人と、支援をする人が力を合わせてよりよい体の動きを探求する活動であるといえる。協力してよりよい動作を探る中で「できた」、「うまくいった」といった成功体験に出会うことができる。今後も子ども達と共にたくさんの「できた」「うまくいった」を共有できるよう、動作法による支援の展開を工夫していきたい。

みなさん、動作法をやってみませんか。一緒に学び合える仲間を募集しています。

文献

成瀬悟策（1995）臨床動作学基礎，学苑社
東田直樹（2016）自閉症の僕が跳びはねる理由，角川文庫

米作りサークル「案山子」の初年度活動報告

上原　隆司（名古屋短期大学　保育科）

1　サークルの立ち上げと背景

名古屋短期大学と桜花学園大学、名古屋短期大学付属幼稚園がある敷地は1560年の桶狭間の戦いで重要な舞台となったと言われる場所にある。織田軍が今川軍に奇襲を仕掛けるチャンスを伺って兵を潜めていた「釜ヶ谷」と、そこから今川軍の本陣があったおけはざま山に向けて駆け上がったと言われる「信長坂」がキャンパス内にあることからもわかるように、キャンパスは起伏に富んだ土地にあって現在も自然が多く残っている。キャンパスの学生と園児は春には竹林でたけのこを掘り、秋には栗の実を拾って季節の味を楽しむことができる。またキャンパスの学生は、希望をすれば畑として整備された土地をゼミやサークル単位で借りて野菜を育てることもできる。これを利用して名古屋短期大学保育科の学生の多くはサツマイモ栽培とイモ掘りを1年生のときにゼミで経験する。

サツマイモはいったん定着してしまえばほとんど水やりの必要もなく、人間の世話をあまり必要としない作物である。そのため、学生が世話を怠っていても秋にはサツマイモは収穫できてしまう。一部の学生（と教職員）は頻繁にイモの様子を見に行って水やりをしたり雑草を取ったりするが、春に苗を植えて当番で数回水やりをしただけで、いつのまにかイモ掘りの時期が来ていてイモ掘りができたという学生も多い。恥ずかしながらこのような現状では、環境教育という点においてキャンパスにある環境を活かしきれていない。

このような状況の中、キャンパス内の土地の一部を田んぼに作り変え、米作りをしようという話が持ち上がった。米は日本人の主食であるが、本学の学生の中には田んぼに入った経験もなく、米がどのように育てられているかということを知らない者も少なくない。田んぼやそれにつながる用水路にどのような生き物が生息し、稲とどのような関係にあるのかということも、保育者となる学生には興味を持って子どもたちと一緒に学んでもらいたいことである。このような背景から、キャンパスに田んぼを作って1年を通して学生に米作りを経験してもらおうと、名古屋短期大学保育科の教員を中心に計画が進められた。学生には米作りを知ってもらうだけでなく、農作物生産の大変さと楽しさを知ってもらい、子どもたちにも正しく伝えてもらえるよう、教員主導ではなく学生が主体的に活動できるように、2018年の4月に米作りサークル「案山子」を立ち上げようという提案を学生に対して行った。

2　活動の状況

当初は土地の整備から活動をすべて学生の手で行ってもらう予定であったが、スケジュールの関係もあって田起こしと種もみの入手については4月の説明会前に教職員で行った。土地の整備や田起こしについては、キャンパス内の畑の管理をしていただいている元名古屋短期大学教授の島田隆道さんにお世話になった。4月に説明会を開催したとき、掲示を見て集まってくれた学生は予想外に多く、70名程度の学生が集った。そこから加入と脱退があり、12月の時点では60名ほどの学生がサークルに所属して活動している。

学生はまず購入した種もみの消毒と浸水させての芽出し、そこから田植えが可能なサイズまでの育苗をした後に田植えを経験した。これまで畑として利用されていた土地を田んぼに流用したため、水はけが良すぎる土壌を改良するために、キャンパス内にある池の底から泥を運んで土壌改良作業も同時に進めた。育苗の際に浅くもみを埋めたため、苗の根本をスズメがつついてもみを食べてしまい、苗が足りなくなって追加で購入するなどのトラブルもあったが、そのようなトラブルを経験して乗り越えることも、良い経験となった。

【田植えの様子】

6月には代掻きを終えて水を張った田んぼに十分なサイズに育った苗を植えた（写真1）。田んぼに初めて入った学生もおり、「気持ち良い」という声の他に「美肌効果がありそう」という年頃の女の子らしい声も多く聞かれた。一方、翌日に田んぼに浸かった脚が赤く腫れたという学生もおり、田植えをする際には大人も子どもも注意が必要であることに気付かされた。

田植えから1ヶ月ほど経った7月、梅雨が明けた田んぼでは1週間ほど田んぼの水を抜く「中干し」を行った。土中に溜まったガスを抜いて酸素を供給することと、稲の分げつ（枝分かれ）を止めて葉ではなく穂に栄養の分配を促す目的で行われる。学生たちは田んぼの水を抜いたこの時に、田んぼの中と周りの畦の雑草取りを行った。暑い中、日傘を差しながら責任感を持ってこの雑草取りにも多くの学生が参加してくれた。

8月には稲に小さな白い花が咲き、9月になると稲穂は重みで頭を垂れ始める。この頃になると再びスズメ対策が必要となる。直接的には田んぼに防鳥ネットを張って、実ったばかりの米をスズメが食べるのを防いだ。それとは別に、サークル名にもなっている案山子を地域の子ども達とともに4体制作し、田んぼの脇に掲げた。効果のほどは不明だが、古くから日本に伝わる伝統を子どもたちに伝えていくことも、このサークルでの活動の中で大切にしていきたいことである。

【案山子づくり】

【稲刈りの様子】

10月には待ちに待った稲刈りを行った。鎌がうまく使えず、最初はぎこちない様子で稲を刈っていた学生も、徐々にコツを掴んでうまく刈れるようになっていった。刈った稲は2週間ほど天日干しして、豊明市の農家さんから借りてきた足踏式脱穀機を使って脱穀を行った。横書きの文字が右から左へ書かれている昭和初期製の足踏式脱穀機には、年配の教員を含めて皆が興味津々の様子であった。

【稲を干す様子】

【脱穀の様子】

3　これからの展望

これを書いている2018年12月現在、学生たちはすり鉢と軟式野球ボールを使って手作業でもみすりを行っている。このあとに精米も控えているが、6m×8m程度の土地で10kg近くの米（もみ）が収穫できたため、もみすりと精米をすべて手作業で行うのは難しい。米作りの過程を学び、その大変さを体験してもらったところで、残りは機械でもみすりと精米を行って、1年間の米作り作業は完了する。

今回、もみから育てた米は「若草もち」、スズメに食べられた後に補充した苗は「黄金もち」という品種で、どちらももち米である。サークルの活動の締めくくりとしては、2019年1月に地域の子どもたちとともに餅つきを行うことを計画している。臼と杵も不要になったものを地域の人に寄付してもらえたので、昔ながらの臼と杵を使った餅つきを子どもたちと行う予定である。この1年、田植え、稲刈り、案山子作り、餅つきというイベントでは、地域のこどもを交えて一緒に行うことができた。サークル立ち上げのときには「就職活動でアピールできる」という動機で参加した学生もいたが、子どもたちにも活動に参加してもらうことで学生の参加意欲も増した。子どもたちと一緒に作業をするときは子どもたちが活動しやすいようにと気を配る様子が見られ、学生にとっても参加してくれた子どもたちにとっても、良い経験となったことだろう。

「田んぼに浸かった脚が赤くなった」、「稲を触った手がかゆくなった」という学生もいた。普段触れる機会がなかったために本人が初めて気づいたケースもあったが、イネ科花粉症などの症状を持つ人がいる場合には注意が必要である。また、水場にはいろいろな生き物が集まるため、そこに近寄りたくないという学生もいた。しかし、普段触れない田んぼの生き物に触れてもらうこともこちらの目的の一つであった。稲刈りの時に水を抜いた田んぼの泥の上をヤゴが歩いているのを見て、ヤゴを知らないためにそれが何であるか分からない学生も多くいた。アメンボが水面を泳ぐ様子も見られたが、アメンボが空を飛ぶということを知らないために、アメンボがなぜ田んぼに現れたのかを不思議に思う学生もいた。このようなことを知ることができるのも、これまでの自然体験の少ない学生にとっては意味のあるものであったと思う。

初年度は田んぼ作りから始めるということで、果たして本当にできるのか、学生が集ってくれるのか、活動に参加してくれるのかという不安もあった。しかし蓋を開けてみれば、周りの人たちの手助けがあったものの、学生たちは活動を楽しみ、田植えや稲刈りといった活動を楽しみながら行ってくれた。活動に参加した学生たちには、この経験から学んだことを米作りだけではなく、保育のいろいろな場面に生かしてもらえるように育ってほしい。そしてこのサークル活動を、後輩たちにずっと引き継いでくれることを望む。

子どもたちの探究心を育む教育・保育
―付属幼稚園の取り組みを通して考える―

名古屋短期大学付属幼稚園長　近藤正春

1 幼児期の教育における「探究心」の位置づけ

本年報のテーマは「子どもたちの探究心を育む教育・保育」とされている。

幼児期の教育のねらいとして、「探究心」は、幼稚園の教育課程編成の5つの内容領域の中の「環境」領域において、次のように明示的に位置づけられている。

「周囲の様々な環境や文化に好奇心や探究心をもって関わり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養う。」（2018年度施行「幼稚園教育要領」、アンダーラインは引用者）

付属幼稚園の「教育課程」では、後段のアンダーラインの部分を次のように展開している。

「・・・・・、理解力、認識力、思考力の基礎を養う。」（アンダーラインは引用者）

なぜ、このような展開をしたかといえば、今次の幼稚園教育要領改正の最大の眼目は幼児期の教育と「小学校教育との円滑な接続」（改正幼稚園教育要領）を図るところにあるからである。そのために幼児期の教育を含めて学校教育全体を貫いて、「知識及び技能の基礎」「思考力、判断力、表現力等の基礎」「学びに向かう力、人間性等」の「資質・能力」を一体的に育むことが求められ、それとの関連で、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が明示され、その中で、「思考力の芽生え」「自然との関わり・生命尊重」「数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚」等が位置づけられている。

これらのことを総合的にふまえた場合、領域「環境」のねらいは、「それらを生活に取り入れていこうとする力を養う」というような曖昧で包括的な表現よりも、そこで求められている「資質・能力」をより明示的に「理解力、認識力、思考力の基礎を養う。」と表現すべきではないかと判断した結果である。

2 幼児期の教育の5つの内容領域と子どもに育むべき「能力」の関係

改正幼稚園教育要領が、幼児期の教育のねらいとして、従来は、「生きる力の基礎としての心情・意欲・態度」というように定式化していたものを、幼児期において育みたい資質・能力として、「知識及び技能の基礎」「思考力、判断力、表現力等の基礎」「学びに向かう力、人間性等」の「資質・能力」を「生きる力の基礎」として位置づけたことは大きな展開といえる。

ひるがえって考えるならば、幼稚園教育要領で1989年改正以来、定式化されてきた幼児期の教育の内容としての5つの領域は、「幼児の発達の側面」から「幼稚園教育において育みたい

名古屋短期大学付属幼稚園教育課程

2017. 7. 18 職員会議決定

本園の教育目標	幼児期の終りまでに育ってほしい姿	保育内容（5領域）	主な内容			
げんきにあそぶこども やさしいこころのこども あいさつのできるこども	①健康な心と体	健康 （健康な心と体を育て、自ら健康で安全な生活をつくり出す力を養う）	①進んで戸外に出て遊び、体を動かし、体の動きを調整する。 ②生活習慣を養い、身辺の自立を促す。（着替え、排泄、食事など） ③健康、安全な生活に気をつける。（汗を拭く、鼻をかむ、手洗い、うがい、衣服の調節など） ④食べることに興味や関心をもち、楽しく食べる。	特別教育プログラム（運動あそび・英語であそぼう）	総合的活動としての行事（家庭、地域（小学校を含む）、大学との連携）・保健計画・安全計画	家庭・地域（小学校を含む地域の諸施設・機関・個人・団体）・大学
	②自立心 ③協同性 ④道徳性・規範意識の芽生え ⑤社会生活との関わり	人間関係 （他の人々と親しみ、支え合って生活するために、自立心を育て、人と関わる力を養う。）	①先生や友だちに親しみをもって関わる。 ②自分で考え行動する。 ③友だちとのかかわりを深め、工夫したり、協力したりして、楽しく活動する。 ④友だちと楽しく生活する中で、よいことや悪いことがあることに気づくとともに、きまりの大切さに気づき、守ろうとする。 ⑤友だちにやさしく、思いやりをもって接する。			
	⑥思考力の芽生え ⑦自然との関わり・生命尊重 ⑧数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚	環境 （周囲の様々な環境や文化に好奇心や探究心をもって関わり、理解力、認識力、思考力の基礎を養う。）	①身近な事象、生き物や植物に興味や関心をもち、生命を大切にする。 ②日常生活やあそびの中で、文字や数量に興味をもち、それを取り入れて遊ぶ。 ③身の回りの自然や生活の変化に気づいたり、不思議に感じたり、理解しようとして自分から関わろうとする。 ④日本や地域の文化や伝統に触れ、親しむとともに、異なる文化にも触れ、親しむ。			
	⑨言葉による伝え合い	言葉 （経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉で表現する力を養う。）	①自分の思いを先生や友だちに言葉で伝える。 ②親しみをもって日常のあいさつができ、生活に必要な言葉を理解し、やりとりをする。 ③人の話をよく聞き、理解する。 ④言葉を正しく使い、言葉づかいや口調などに気をつけて話す。 ⑤絵本や物語に興味や関心をもち、親しむ。			
	⑩豊かな感性と表現	表現 （感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。）	①自分の思いを描いたり作ったりして表現する。 ②生活の中で、自分のイメージを豊かに表現し、遊ぶ。 ③自分の感じたことや考えたことをすなおに表現する。 ④音楽に親しみ、歌ったり踊ったりして表現することを楽しむ。 ⑤自然の中や周りにある音、形、色に気づき、いろいろな素材や遊具、楽器に親しみ、工夫してあそぶ。			
教育目的：桜花学園の設置目的である「信念のある人間」の育成を期して、生涯にわたる人格形成の基礎としての幼児期の教育にふさわしく、すべての子どもを包容し、「生きる力」の基礎を培い、家庭と連携しつつ子どもの最善の利益を実現します。						

幼稚園教育要領

教育基本法・学校教育法

資質・能力」を幼児の生活する姿に即して捉えたものとされており、「幼児の発達の側面」から幼児期に育みたい「資質・能力」をどう捉えるかは一貫して重要な課題であったといえる。その意味では、本質的な課題があらためて浮上してきたともいえるであろう。

子どもの発達を能力との関係で理解する際のオーソドックスな見解を見ておきたい。

子どもの発達を5つの側面から捉えようとする考えはアメリカやイギリスなどでもほぼ共通に確認されており、その意味では、幼稚園教育要領が子ども発達を5つの側面から捉えて、教育の「ねらい及び内容」を示していることは国際的にも通用性のあるものといえる。子どもの発達領域については、「身体」、「社会性」、「言語」、「感情」、「認知」（physical,social,emotional, language,cognitive or intellectual）の5つの能力と結びつけて把握する見解が共通に示されている。（全米乳幼児協会編『《誕生から小学校低学年にかけて》乳幼児の発達にふさわしい教育実践』、東洋館出版、2000年、Penny Tassoni."Caring for Children – A Foundation Course in Child Care and Education" Heinmann Educational Publishers, 2002など）

以上の考察から導きだされる結論は、領域「環境」を「認識」ないしは「認知」というような領域として再定義する必要性であり、そこまで及び得ないとした場合、領域「環境」についての本質的理解を促すような確認が何らかの形で不可欠であるということである。

このように領域概念を理解することにより、小学校との連携の課題を意識した場合の子どもの認識発達（認知発達）についての幼児期にふさわしい教育を計画的に進める上での基本概念上の土台が明確になると考えられる。

3　子どもの探究心を育む付属幼稚園の取り組み

①「探究心」を育む探索活動、観察活動

付属幼稚園は「げんきにあそぶこども」を教育目標の第一に掲げ、活動を展開している。幼稚園教育要領では、「自発的な活動としての遊びは、心身の調和のとれた発達の基礎を培う重要な学習である」とされている。

大学のキャンパスにある竹林やどんぐりなどの雑木林は、子どもたちの「探究心」を刺激する貴重な環境であり、子どもたちは季節毎に学年やクラス毎に出かけては、竹の子ほり、虫捕り、どんぐり拾いを愉しんでいる。身近にこのような自然環境があることは、子どもたちの探索活動を通しての学びを支えてくれていると考えている。

園庭には、ザリガニや蛙などの水生生物が生息している池があり、子どもたちはそれら生き物を観察したり、捕まえたりして遊んでいる。オタマジャクシから蛙への変化・成長等、生き物の生きた姿を身近に観察し、生命の神秘や生命の尊さなどを子どもたちが幼稚園での生活の中から、自らの感覚・感性として育んでいってくれることを期待し願っている。

②「探究心」を育む栽培活動

子どもたちは春から夏に向けてはトマトなど、夏から秋に向けてはサツマイモなどの栽培活動にも取り組んでいる。これらの活動も子どもたちの「探究心」の基礎を耕す重要な活動として考えられる。

子どもたちは自ら植えた植物が実を結び収穫できることを楽しみに生活しているが、今年の秋は、サツマイモの生育が良く、大収穫であった。

③「探究心」を刺激し合い、集中心、持続力を育む「ごっこあそび」

子どもたちは、先生の援助も得て、収穫したサツマイモをふかして、サツマイモパーティーなどの活動を学年、クラスで行っている。

昨年度は、年長クラスの子どもたちが、ふかしイモでお店屋さんごっこの活動を展開し、子どもたちにも大好評であった。幼稚園のホールでお店を開き、お店の飾りつけ、商品の配置、お客様の案内、購入する際のチケットの作成など、必要な準備を子どもたちがいろいろなアイデアを出しながら先生とともに相談し、実現していった活動であった。

このような子どもたちの協同による発展的な活動は、子どもがお店屋さんをやりたいと意欲を持ち、その目標に向かって子どもたちが相互に「探究心」を刺激し合い、集中し、持続した活動を展開したことで実現できた活動といえる。

お店を開いた当日が公開保育日であった関係で、見学していただいた豊明市内の幼稚園・保育所関係者からも高い評価を得た活動となった。

4　小学校教育との円滑な接続に向けて

「探究心」は学校教育（幼稚園も含めて）で共通に培うこととされている「資質・能力」の中の「学びに向かう力、人間性等」として位置づけられている非認知的能力の重要な要素といえるものであり、「知識及び技能の基礎」「思考力、判断力、表現力等の基礎」を培う上での土台となるものと考えられる。

課題としては新たに幼児期の教育の中で、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が明確にされ、そのこともふまえつつ総合的に活動を計画・展開していく中で、「知識及び技能の基礎」「思考力、判断力、表現力等の基礎」とどのようにつなげていくかが、現状では必ずしも明らかとはいえないことである。実践を検証しつつ、まさに私たちが「探究心」をもって、継続的に取り組んでいくことが求められている課題といえる。

（兼：桜花学園大学副学長）

2018 年度第 16 回夏季保育セミナー（報告）

堀　由里（桜花学園大学保育学部）

名古屋短期大学・桜花学園大学を卒業した若手の保育者を対象とした夏季保育セミナーが7月29日（日）に開催されました。当日は台風の影響もあり、開催が危ぶまれましたが、どうにか実施することができました。足元が悪い中、参加してくださった卒業生にとっても有意義な一日になったと思います。

午前中は全体会として、人形劇団むすび座さんによる人形劇・ワークショップを、午後は、名短・桜大の教員による講演・ワークを中心とした分科会を開催しました。

■日　時：2018 年 7 月 29 日（日）10:00 ～ 16:00
■場　所：名古屋短期大学・桜花学園大学
■主　催：チャイルドエデュケア研究所
■参加者：全体会 35 名、分科会 29 名

〈プログラム〉

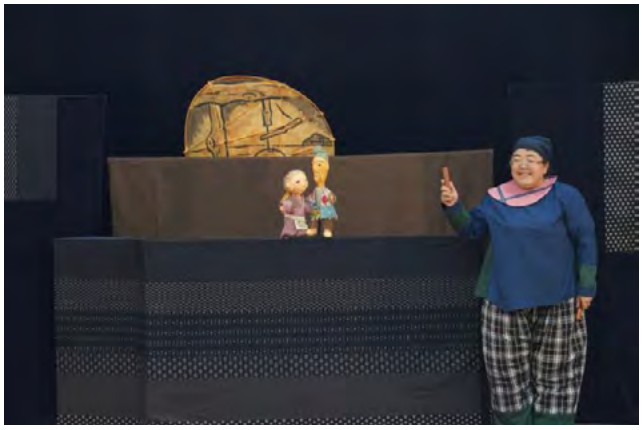
1. 開会式　　10：00 ～
   挨拶、新任教員・新学科紹介
2. 全体会　　10：10 ～ 12：00
   人形劇「こぶじっさ」、ワークショップ
3. 昼食・休憩　12：00 ～ 14：00
   教員と仲間とともに
4. 分科会　　14：00 ～ 16：00
   AB：よりよい人間関係の作り方（※）
   C：気がかりな子どもの対応
   D：子どもが主体的に取り組める保育内容
   E：造形ワークショップ

※分科会は当初5つのテーマを設定しておりましたが、参加人数の関係上、当日A（子育て支援の在り方）とB（保育者間の人間関係）の合同開催とさせていただきました。

【人形劇「こぶじっさ」】

ストーリー：頬に大きなこぶのあるお爺さんはお婆さんと仲良く暮らしていました。ある新月の夜、山に薪を取りにいったじっさ（お爺さん）は、森の中で迷い寝てしまいます。夢かまことか、じっさは宴会中のおかしな山神たちに出くわし、ばっさ（お婆さん）の元に帰りたければ踊るように言われてしまいます。しかし、じっさは怖くて震え、思うように手足も動きません。そんなぎこちないじっさの踊りが楽しく、山神たちはじっさを帰したくありません。そこで、山神たちはじっさのコブを取ってしまい、次の新月にまた来るように伝えます。里に帰ったじっさは、ばっさに事の顛末を話し…。

今回は幼児向けの「こぶじっさ」を約30分間披露していただきました。3人という少人数で実施しているとは思えないほど、スムーズな展開で、卒業生も教職員も童心に戻って人形劇を楽しみました。



背景の作り方、人形の動かし方、発声の仕方、鳴り物の演出、場面展開のスピードなど、学ぶことはたくさんあったと思います。現場で働く卒業生たちが、子どもたちに生の児童文化を提供できる契機になったと思います。

その後の質疑応答では、場面の早変わりの仕方や演出の仕組みなど裏側についても丁寧に教えていただきました。

例えば、「声の出し方、動き方で気をつけていることは？」という質問に対して、「人形よりも本人が出てしまってはよくない。普通の役者とは違う。人形をたてる。声は場数、慣れ。最初は恥ずかしいかもしれないけど。人形の大きさやキャラクターによって声のボリュームや高さを変える。イメージして喋ることで育っていく。よく園で子どもたちが積み木を車にみたてて『ブーン、キキー』ってやっている。それと同じ。『そんなに色んな声出ないよ』、とよく言われるけど、意外にできる。状況に応じて自然に声は変わる。周りの友達を観察してみるとよい。」という回答をいただきました。普段の保育にすぐにでも活かせるような具体的なアドバイスであったと思います。

また「人形劇を見ていると子どもたちはリアクションするが、どのように対応しているのか？」という質問に対して、「子どものリアクションに答えてしまうと、『必ず答えてくれるんだろう…』という思いが子どもたちの中に築かれてしまう…」という回答をいただきました。保育者として絵本の読み聞かせをはじめ、子どもの前で何かをする際、子どもたちの声を拾うのか、拾わないのか迷うことがあります。今回のような大勢の前で披露する際には、一つひとつの声を拾ってしまうと収拾がつかなくなる可能性があります。状況をみながらそれぞれのケースに対応できるようになれたらいいと思いました。

【むすび座によるワークショップ】

人形劇の後に約30分間ワークショップが開かれました。今回は事前にタオルと洗濯バサミを持参するよう指示があり、それらを使ったものでした。

まず、二人一組になり、①タオルを投げ合う、②タオルをかつらにしたり、ネクタイやパンツのように見立てたり、洗濯バサミを角に見立てたり、③タオルをウサギに見立てて動かしたり、その場で簡単にできる見立て遊びを教えていただきました。体に緑の大きいタオルを干して草原にみたて、ウサギを走らせたり、キリンやゾウなど様々な動物が登場しました。背景を作ったり、歩き方や発声を工夫することで、表現の幅がどんどん広がっていきました。

次に、ウサギ、ペンギン、トリの折り方が書かれた紙を配布していただき、参加者も実際に作ってみて、前に出てパフォーマンスをしました。

ウサギは耳の長さを変えるとネコになったり、顔をとがらせるように持つとキツネになりました。また2つめのタオルをまるめるとウサギの胴体になります。洗濯バサミで後ろをつまむと指人形にもなりました。

ペンギンは頭部分、体部分で2枚使用しました。胴体は硬めのタオルの方が作りやすいそうです。頭部は黒いタオル、体は白いタオルで作るとよりペンギン感が増すということでした。

トリはタオル1枚、小さい洗濯バサミ1つ、大きい洗濯バサミ1つを使います。小さい洗濯バサミはくちばしにするため黄色で、タオルを黒色にするとカラスに、白色にするとハトになるということでした。ただ、子どもたちの居住地によって、見立てるトリは異なっており、海に近いところに住んでいる子どもたちは、白いトリをカモメと、山間部に住む子どもたちはシラサギとして捉えることが多いということでした。普段子どもたちがどのような環境に身を置いているのかによって、身近な動物も異なってくる

2018 年度　第 16 回夏季保育セミナーの報告

ことがよくわかります。保育者として、子どもたちにどのような環境を準備するのか、どのような体験を積ませるのか、改めて考える機会をいただいたようでした。

「これが絶対！という作り方はない！」、「どういうふうにしたらそう見えるのか！」を考えて作ってみようというお言葉もいただきました。保育の現場においても、作っておしまい、ではなく表現し、楽しむことまでつながっていきます。

参加者も思い思いにタオルや洗濯バサミを使用し動物を作っていきます。一人ひとり作品とともに自己紹介をしました。さすが現役保育者！皆さん堂々と楽しそうに表現をしていました。

その他、手袋（赤、黄、青）で何かを表現し、参加者に当ててもらう遊びもしました。両手に赤手袋でカニ、タコ、お花、両手に黄色手袋でチョウチョ、黄色と青でカタツムリ、黄色と赤でニワトリ、手袋をまとめてお手玉…などアイデアは尽きません。

参加者からは、「タオルでの遊び方をたくさん知れてためになった」、「ハンドタオルでの製作は明日からでも子どもにできると思い早速やろうと思いました」、「声の出し方、間のとり方などもとても参考になりました」など感想が挙げられました。

★人形劇団むすび座★

1967年に東海地方で初のプロ人形劇団として名古屋市に誕生しました。保育園や幼稚園で年間200ステージをこなし、海外でも多数の公演を実施している。

【分科会：AB よりよい人間関係の作り方】

担当：吉見先生（名短）、小柳先生（名短）

職場にいる様々なメンバーに対する「期待する関係性」と「現実の関係性」を参加者それぞれが記述したうえで、期待値と現実のギャップが大きければ大きいほどストレスになるというお話がありました。多くの参加者がギャップが大きいことを認識していました。

また、アサーション・トレーニングについてもお話があり、相手も自分も尊重することが大切であることが伝えられました。

参加者からは「なかなか職場（職員）に言えず、モヤモヤしていた」などの感想が挙げられました。参加者はベテランの先生に気を遣いすぎて疲れてしまっていたり、一緒に担当する先生との仕事への取り組み姿勢の違いを感じているなど、多くの人が経験するであろう感情を共有することができました。

【分科会：C 気がかりな子どもの対応】

担当：原田先生（桜大）、小柳津先生（桜大）

「好きなテレビ番組の話をし続ける子」、「体操の時間を笑顔でやり過ごす子」など気がかりな子どもについて話題提供された後、ブレーンストーミングを用いて気がかりな子どもについての事例検討を行いました。子どもの様子を共有し、見出しをつける作業の中で子どもについて多角的に考えるきっかけになりました。

保育者としてはその子の背景（家庭環境や親の就労状況等）にいち早く気づくことが大切で、専門機関との連携を図ることを視野に入れていく必要性を再確認しました。

参加者からは、「ブレーンストーミングという方法で、話しやすかった」や「気になる子の姿を書き出して話し合うことで支援

の仕方が少しずつ見えてきて良かった」などの感想が挙げられました。

【分科会：D 子どもが主体的に取り組める保育内容】

担当：岡林先生（名短）、上村先生（桜大）

「モヤモヤを出そうの時間」として前半は、現在担当しているクラスの年齢によって3歳未満児でのグループ、3歳以上児でのグループに分かれて各自の悩みや課題を出し合いました。後半の「すっきりやるぞの時間」には、前半の話し合いから明日の保育にどうつなげるかを意見交換しました。

またDVDを見て、子どもは遊ぶことによって豊かになっていくこと、子どもは自分たちで遊びを作ったり発見したりする内なる力を持っていること、その力を育むためにどんな環境を整えるかが大切であることなどを学びました。

参加者からは、「就職をしてから、先生方の話を聞くことで保育について理解もぐっと深まるので良かった」、「他園で働く人達の保育事情も知れて勉強になりました」などの感想が挙げられました。

【分科会 E 造形ワークショップ】

担当：神谷先生（名短）、田端先生（桜大）

ゾウさんの歯磨き手袋シアターを作りました。軍手の先に磁石を取り付け、画用紙で作った食べ物を鼻先につけられるような仕組みになっています。

手を動かしながら、日ごろの保育の悩みを互いに打ち上げ、先生も交えて話し合いました。

参加者からは、「実際保育で使えるものを作ることができて良かった」などの感想が挙げられました。

終わりに

懐かしいキャンパスで気のおけない仲間や先生と、それぞれが抱える悩みや現状を打ち明けることができたと思います。一生懸命やろうとすればするほど保育の難しさ、奥深さに気づきます。明日からまた子どもたちの前で元気いっぱい活躍するための1日であったならば幸いです。

冬の講演会
新指針・新要領に沿った教育・保育の在り方
～子どもの育ちという視点から保育を見直す～

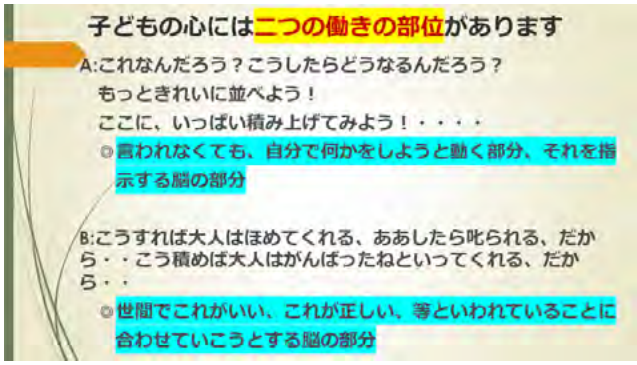
太田早津美（桜花学園大学　保育学部）

2018年12月2日（日）午後に汐見稔幸先生をお招きし、冬の講演会を開催しました。本年度は申し込みが1週間で満席になる盛況ぶりで、指針や要領の改訂後の保育や教育をどう実践していけばよいかという課題に悩む、現場の幼児教育・保育関係者の現状や関心の深さを感じました。汐見先生にはそうした課題を明らかにするため、子どもの育ちという視点から保育を見直すことについて具体的にご講演いただきました。300名を超える参加者は真剣に聞き入り、子どもの育ちをどうとらえていくか、保育の環境の大切さ、保育者とのかかわりの大切さについて学び、頷きながら受講されていたのが印象に残っています。今後の保育実践に役立ていただけることと思います。

指針が改訂した後の保育をどうしていくか

改定の背景には、子どもの発達や保育の考え方の変化がある。見方が変化しているのである。子どもの育ちが人との関係性の中で育ってくるということを今まであまり議論してこなかった。今回の改定では関係性の中で子どもが育つことが大切であると示されている。

子どもの心には二つの働きの部分がある



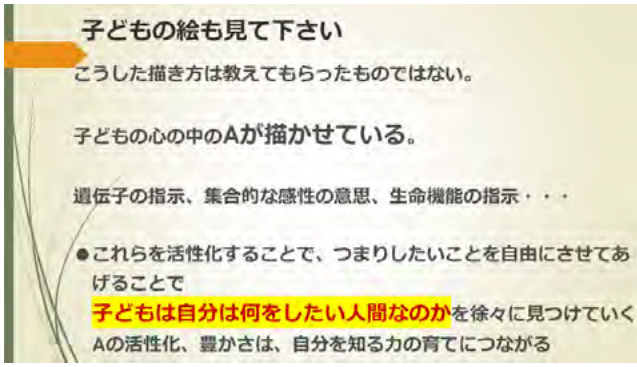
Aを自分脳、Bを社会脳とすると、子どもは好きなようにする自分脳の部分が多く、大人は世間の評価を軸にする社会脳の方が多く働いている。人間はこの二つの脳が複雑に絡み合いながら、折り合いをつけ生きている。大人になるということは社会脳を増やし洗練していくことである。

発達には縦の発達と横の発達がある

人間は一つの能力を身に着けると、それを使ってどんどんいろいろなことをしようとする。横の発達を保障すればおのずと縦の発達をする。

子どもの行動には子どもなりの理由があるので、子どもの行動を理解し、共感し、子どもの気持ちを満たしてあげながら、大人の意向を伝える事が大事。「あーしなさい」「こーしなさい」というより、子どもがやりたいと思うことをする方が発達する。そのための環境を保障することがことや、子どもをよく観察し理解することが重要である。保育者が子どもをどうとらえるかが肝心で、「今こうしたいんだろうな…」と子どもの気持ちが見えてくるといい。

子どもの絵



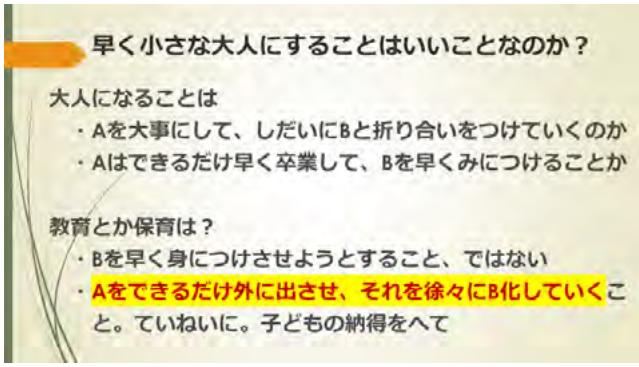
子どもの好奇心や主体性を育てることが大切である。

福井県若狭町は、町ぐるみでアートをして絵画展をしている。子どもにはどう描くかの指導は一切していない。見て、触り、臭いを嗅いで、自分なりの表現をするのを見守っている。好きなように書かせながら、次に本物の画家の絵を見せる。いつまでに書くとか、時間を区切ったりもしない。

Aの世界の中の個性を大切にすることでBの世界が分かるようになる。個性はその子が持っているもの。子どもがいびつに書くのは子どもの美意識。

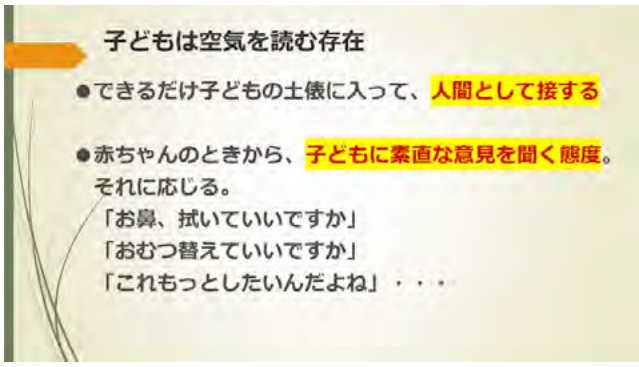
自然界にないのが直線。人は曲線に美意識を感じている。

早く小さな大人にすることはいいことなのか？



Bの社会脳を早く発達させることより、Aの自分脳が出せるよう保障していくことで、Bの社会脳が育っていく。Aをどれだけ充実させてBに近づけるかと、横の発達を充実させることが大切。

子どもは空気を読む存在



ベテラン先生のクラスは落ち着いているが、子どもの目は死んでいないか？子どもは先生の性格や行動を感じながら行動している。

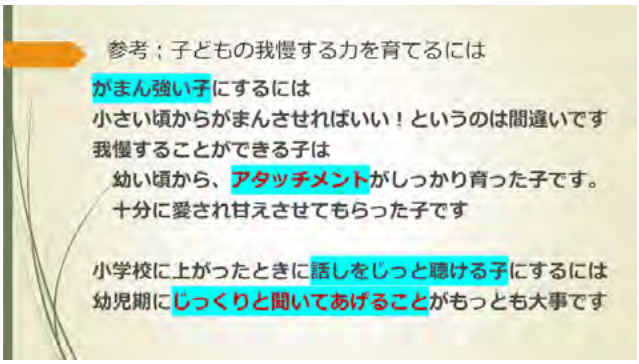
一番空気を読んでいるのが小さな赤ちゃん。無意識に適応している。小さい子ほど気持ちを大切にしてあげないと本当に大切にされていると思えない。

人間として大切に接することが重要である。自分が大事にされているという感覚や愛されているという感覚が、自分がありのままでいいのだということや自己肯定感を育む。

デンマークの子育て

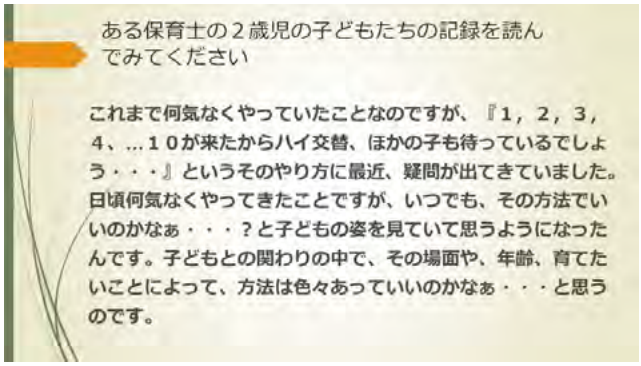
デンマークでは「どうしてママの言うことを聞かないの？」と言わない。「あなたはどうしたいの？」「どう思うの？」と聞く。自分の意見を言うようして、「そうだね」としっかり受け止めることを大事にしている。

子どもの我慢する力を育てるには



子どもの不安な気持ちを抱きしめてあげながら満たしてあげることが大切。身体をしっかり接触させることで癒される。0．1歳児の時にしっかり抱いてあげると、何かあった時に助けてもらえることが理解される。そうしたアタッチメントがしっかりできている子は、3．4歳になった時に我慢できる、ルールーが守れる、頑張れる子になれる。

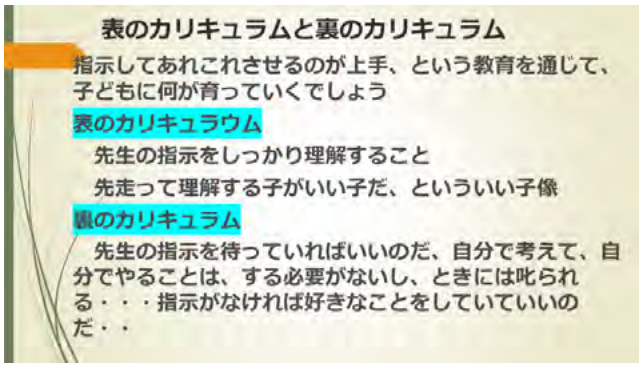
ある保育士の記録をよんで



順番に交代することも、その子の思いを十分満たしてあげるような方法にしたら、その子が人に代わってあげたい気持ちが生まれてきた。人を想う気持ちが生まれてきた。

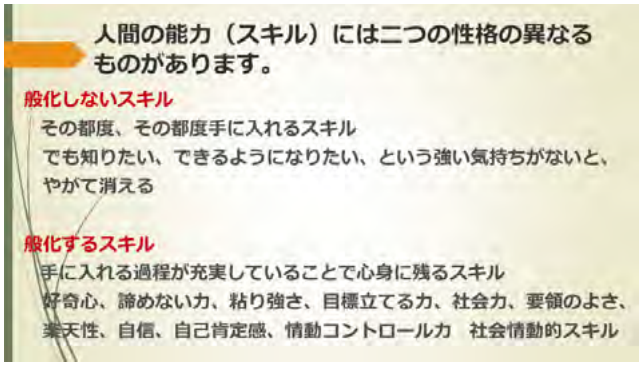
冬の講演会
「新指針・新要領に沿った教育・保育の在り方」（報告）

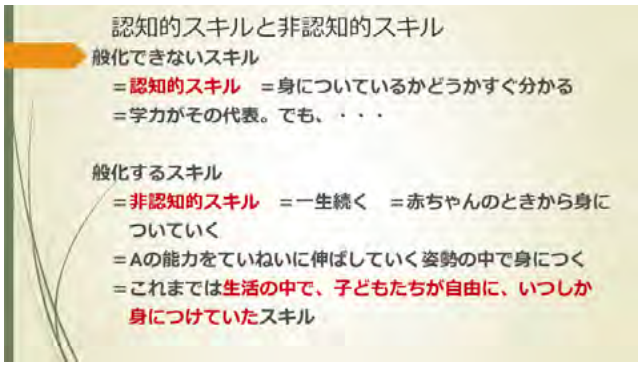
表のカリキュラムと裏のカリキュラム



表のカリキュラムだけでは、指示がないと何をしていいか分からなくなってしまう。

2 つの能力





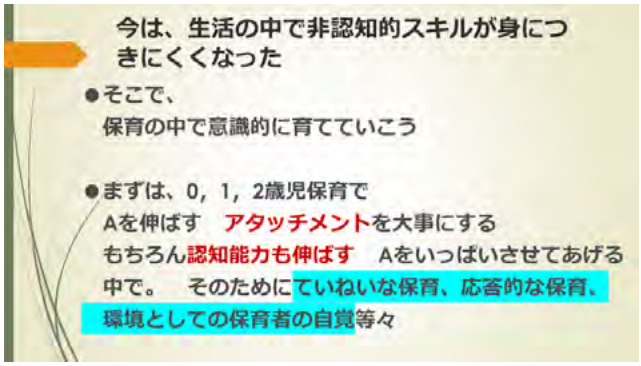
非認知的スキルをしっかり作ってほしい。今までは、文字や数を早く教えればいいと思ってきた。

なぜ、4．5歳で英語塾に行っても中学生になった時に上達しないのか。認知スキル（学力）は、どうしても身に着けたい、覚えたいという強い意志がないと身につかない。またそれを実際に使わないと消えていく。

認知能力を育てようとしたら興味・関心を育てることが大切。しかし、人間の能力はそれぞれ違うし、認知的スキルは一つのものを身に着けても他に応用ができない。すべてに通じないので、いろいろな能力を身に着けていかないといけない。

非認知能力は社会的情動スキルで、社会で上手に生きている人はこういう能力が高い。人間として色んな能力が高い。これは一回身に着けたら応用が利く。この能力は赤ちゃんの時から身についていく。このことからも0．1歳児の保育の重要性が分かる。いろいろなことを経験させ、子どもの好奇心や主体性を高めるように保育することが重要である。

今は、生活の中で日認知的スキルが身につきにくくなった



昔は不自由な生活の中で、頭を使い工夫していく中で非認知能力が身についてきた。これからの保育の中では、自分たちで考える、失敗する、あきらめずに続けることや、そうした状況を仲間と共有し、見える化し、繋げていかないといけない。

キーワードは共有。みんなの知恵を合わせて繋げていくようにすることが大切である。

非認知能力を育てることが大切であり、子どもは関係性の中で育っていくことを忘れないようにして保育をして欲しい。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

汐見先生にはご講演の後に参加者からの質問にも丁寧に応えていただき、長時間の講演があっという間に思えるほど、充実したお話を伺うことができました。有難うございました。

非認知能力を育てることの大切さ、子どもの自主性や主体性を伸ばしていけるような環境の工夫と、子どもとの関係性の大切さを再認識できました。参加者の皆様がそれぞれの職場で学びを共有し、これまでの保育を振り返るとともに、明日からの保育に活かしていただけることを願っております。

■■　参加者からのアンケート　■■

◉時代が変わって指針が変わっても子どもの本質は変わらないと思います。赤ちゃんも大人がわかっている。本当にその通りだと思います。小さくても人と人との関係として接していきたいと日頃から感じています。明日からも自信をもってそんな保育をしていきます。

◉「ある保育士の子どもの記録を見て下さい」という所が同じ疑問だったのでお話を聞けてとても参考になりました。

◉子どもの思いを大事に子どもの声を聞こうという保育を目指しているところです。日々の保育で意識したいところを改めて感じながら聴きました。

◉とても分かりやすく引き込まれました。今、育休中で子育てでも迷ったりどうしたらよいか悩む事が多かったので、少し光が見えてきました。「あー私は子どもの思いをしっかり聞いてあげれていなかった」と反省しました。仕事の時には気をつけていたことや意識していた事を自分の子育てでは少し忘れていたように思いました。改めて気づく事のできたいい時間でした。

◉自分の保育を振り返るとても良い機会になりました。今０歳児担当をしていて、オムツ替え、鼻ふきなど声かけはしていますが、返事まできいていなかったなと思いました。今後保育で、念頭においていきたいと思います。

◉私は今０歳児クラスの担任をしています。友達同士の関わりが増えてきておもちゃの取り合いや、ひっかき、かみつきなどが毎日のように起こり「それはバツだよ！」「やっちゃダメ」と強く言ってしまっていました。今日の話を聞いて、子どものその時の気持ちを理解してあげることが大切だと分かりました。注意する前にしっかり考えて、その子の気持ちも受け止めていこうと思いました。オムツ替えや着替えの時にも機械的にならず、コミュニケーションを取っていこうと思いますが、その為には自分自身に余裕がないといけないと思いました。

◉とても楽しく、今私達が育てなければいけないものを分かりやすく学ぶことができました。日々の保育はもちろん、自身の子育てにも見直し実践していきたいと思いました。

◉子どもの育ちを保障できる保育をできるように活かしていきたいです。そして2歳児のエピソードは自分にもよく当てはまり、考え方が変わりました。私も最近、三輪車を使い初めはわっと集まりどう対応したらよいのか迷っていた所なので、とても良い学びになりました。

◉指針で大切にされることを分かりやすく教えていただきました。B型の子でなくA型の子を育てていけるようこれまでの保育を振り返りたいと思いました。

◉今までの自分の保育を振りかえろうと思いました。どんなことにも、子どもたちの中に理由があるということ、考えることをしてから保育者として関わっていくようにしたいと思いました。

◉横の発達の大切さ、どんな子どもの姿にも、何でこういうことをするだろうとわかるまで観察し、考えることの大切さすごく心にひびきました。本当にありがとうございました。

◉私のクラスもおりこうな子が多く、「良いクラスね。」と言われることが多いです。今回の講演で子どもの自分脳の部分をつぶしていたのかもと考えました。自分が保育しやすいように子どもを支配していたのかもと思うと子どもたちに申し訳なく思い反省しています。明日からまた保育の毎日ですが、今からでもAの自分脳の部分を大切にしていけたらと思います。気付かせて下さった汐見先生には感謝です。ありがとうございました。

◉新指針に変わり、実際に何をどのようにしていけば良いのか分からないまま保育を行っていたが、今回の先生のお話を聴いて自分の保育の手がかりとなり、振り返りとなりました。子ども理解を深め、子どもの主体を伸ばしていけるよう今後の保育に生かしていきたいと思います。ありがとうございました。非認知スキルが身につくような工夫を考えたいです。

子育て交流室「さくらんぼ」に参加されるママへのインタビュー

今回は、1歳児の交流会にお邪魔させて頂き、交流室を利用して下さっている親子の様子と、日々の子育てについて話して頂きました!

Q：子育て交流室に来るきっかけは？

- 友達に紹介してもらってこの交流室を知り、利用するようになりました。今日も一緒に来ています。
- 地域の子育てグループに入っていて、その関係でこちらの交流室を知りました。
- 大学の近くに住んでいて、ホームページから知りました。歩いてくることができるので、とても有り難いです。
- 上の子どもが以前交流室を利用していたのですが、今は下の子が利用しています。

Q：居心地の良さはどのようなところですか？

- 子どもの年齢ごとに参加できる日が分かれているため、利用しやすいと感じています。近い年齢の子ども同士だと安心して遊ぶことができるし、子どもも母もお友達を作りやすいのがうれしいです。
- こちらの交流室は保育士の先生がいつもいてくださるので安心です。相談したいことがあれば気軽に保育士の先生に相談できることがうれしいです。
- 私（母）一人で2人の子どもを見ながら遊ばせるのは、他の場所ではなかなか難しいと感じています。ここでは2人連れてきても安全に遊べるし、保育士さんや他のお母さんの誰かが様子を見てくださるので安心です。
- 交流室でできたお友達と、そのまま食堂にランチに行けることが楽しいです。

Q：子育てネットワークは広がりましたか？

- 誕生日が近いお友達のお母さんとは子育て（特に今は離乳食）の相談をしたり、数年後に入る幼稚園や保育園の情報なども聞けたりして助かっています。

- 私、そういうのがダメなんです。もう1ヶ月くらい来ているけれど、まだ今は誰とも仲良くできてない。子どもと二人で家に居ても良くないので、こういう所に来て子ども同士の関わりを積極的に作っていこうと思っています。だけど、毎日来ることができないのが悩み・・。週に2回くらい参加しています。もっと開設していたら良いんだけれど、お昼からは行くところが無いのでキャンパスの裏の用水路の道を歩いたりしています。

Q：交流室で気に入っている活動やあそびはありますか？

- 毎日、必ず一度は子ども達が集まって、歌や絵本、手遊びをやってくれることが有り難いです。上の子は、よく動いてじっとお話を聞くことができなくて心配していたんだけれど、近藤愛先生がいつもじっくり優しく接して下さったお陰で、お話を聞く耳を持つ子になりました。やっと、幼稚園に行っても大丈夫かなと思えるようになってきました。
- 我が家は小さい頃からこの交流室にずっと参加させてもらって、上の子は現在、附属幼稚園に通ってい

ます。上の子は、交流室でも最初の頃は緊張してビクビクしながら遊んでいたのですが、下の子はお兄ちゃんを見ながら育っているからか、大胆に何でも挑戦していく感じで、兄弟でも遊び方が違いますね。

・スタッフも優しいし、おもちゃの種類が他の場所と違います。手作りのものがあったり、滑り台があったり、ボールプールもある。年齢別に日が分かれているので、安心して子どもが遊ぶことができるんです。テラスがフラットなので、外に裸足で出て行くことができるし、年齢別に曜日設定してくれているので、おもちゃを大きい子に取られたり、ぶつかったりする危険が少なくて安心しています。

Q：思い出に残っているイベントはありますか?

音楽ですね。幼稚園のホールでやってくれたり、学生さんが来て音楽をしてくれたりするのは楽しいです。学生さんは、子どもが小さくても、本気で演じられますよね。リトルマーメードは、歌を聴いて親の私も泣きました。最近、オズの魔法使いの“魔女”を見て、怖くて子どもが泣き出しました。笑）子どもはなかなかコンサートには行けないから、嬉しいです。

Q：今後どのようなイベントがあるとよいでしょうか?

・子どもたちはお姉さんと遊ぶと喜ぶので、学生さんたちにたくさん遊んでもらえると嬉しいです（学生さんとかかわりを持てるような活動）。

最後に・・・

子育て交流会に参加されている保護者の皆さまにお話を伺い、改めて「つながり」の大切さについて考えました。子育て交流会に参加することは、子どもたちにとって新たに出会うお友達との「つながり」となり、社会への第一歩を踏み出す機会となっているようです。また、子育て交流室は、保護者の方々にとって、共に子育てをしながら喜びや悩みを共有できる他の親子との「つながり」の機会であり、この場所が安心できる子育て環境づくりに役立っていることを教えていただきました。大学にとっては、本学園の教育について地域の方々にご理解とご協力をいただく「つながり」の窓口となっています。

これからも人と人がつながる場として子育て支援室がより一層皆様に愛されるよう、運営の工夫を続けていきたいと思います。

（文責：高須裕美・小柳津和博）

■ 2018 年度　子育て交流会　支援室開放日　利用者数

2019/3/9 現在

	交流会/回	子ども	大人	学生	開放日/回	子ども	大人	学生
4月	8	129	121	56	3	62	59	8
5月	13	179	169	71	7	100	95	34
6月	13	221	203	96	6	129	115	9
7月	7	146	129	39	3	51	45	3
9月	12	168	137	23	6	94	83	3
10月	12	156	122	65	3	47	41	7
11月	11	177	149	67	8	114	99	0
12月	8	115	91	35	4	44	35	6
1月	9	149	126	57	4	77	66	0
2月	11	168	132	15	4	57	47	0
3月	4	41	33	6	2	37	28	0
計	108	1,649	1,412	530	50	812	713	70

★子育て講座のご紹介（2018年度）★

音楽遊び、運動遊び

2018/6/25、7/2　保育科　高須裕美

保育専攻科生による夏の音楽遊びは、2回講座でした。1回目は、歌の大好きな女の子のお話でした。お姉さんの歌とダンス、ブラスバンドの音に圧倒されながら、お話をじっくり見て、初めて聴く音や楽器に興味津々の子どもたちでした。

2回目はオーストラリアの保育園で大人気の絵本“We're going on a bear hunt”を題材にし、図工の授業とタイアップして大道具にも工夫を加え、絵本の中の遊びを実際に体験できるようにしました。何と言っても子ども達は、体験するのが大好き！お姉さんや家族の眼差しに守られながら、風船の草、段ボールで作った橋渡りを思う存分楽しみました。

親子運動ひろば

年間8回　平野朋枝

「親子運動ひろば in 名短」として、専攻科２年生と保育科1年生が運動遊びの場を企画・運営しました。対象は、満2歳～就園前までの子どもさんとその保護者の方です。広い体育館の全面を使って、跳び箱とマットで作った山や平均台の一本橋、ゴロゴロ転がるふかふかマット、急な上り坂に滑り台など、様々な遊び場を作っています。走ったり、登ったり、跳んだり、くぐったりなどの遊びの中で、たくさん動いて、心も体も元気になって欲しいと願っています。子どもたちは、初めは慣れない環境で緊張気味ですが、回数を重ねる毎にダイナミックな動きができるようになってきています。

今年度は、学生手作りのアンパンマンのコーナーもあり、子どもたちにとても人気でした。お母さんと触れ合いながら体を動かすリズム体操の時間もあり、親子一緒に笑顔で活動しました。

クリスマス会

2018/11/30　保育学部　基村昌代

チャイルドエデュケア研究所恒例のクリスマス会。毎年、名古屋短期大学附属幼稚園のホールをお借りして行っています。今年度も子ども52名、大人49名の計101名という大変多くの方にお越しいただきました。内容は桜花学園大学保育学部４年基村ゼミ生９名によるオペレッタ「美女と野獣」の鑑賞です。難しい内容なのですが、コンセプトは子育て支援！　お子さまがいて、なかなか劇場に足を運ぶことができないという保護者の方々のために、お子さまと一緒に楽しめる空間作りを心がけました。音楽に合わせて体を動かしているお子さま、大きな音にびっくりしてしまったお子さまなどいらっしゃいましたが、保護者の方と一緒に観劇をするという体験ができ、最後には大きな拍手をいただくことが出来ましたので、公演を楽しんでいただけたのかなと感じております。来年度は「オズの魔法使い」です。ぜひ楽しみにしていて下さい！

はじめての粘土遊び

2019/1/24　保育学部　太田早津美

1歳から3歳を対象に、小麦粉粘土を使って遊びました。当日は38組、42名の親子に参加して頂き、小麦粉粘土を使った粘土遊びを楽しみました。粘土遊びは手の感覚を刺激しながら、創造力を高めることができる楽しい遊びです。小麦粉粘土は、材料が小麦粉・塩・水・少量の油と食紅で、すべて食品を材料としているため、誤って口に入れても安全なことから、低年齢児の感覚あそびに適しています。ただし、小麦粉粘土は小麦アレルギーのないお子さんが対象です。

はじめはお母さんが型抜きを使って遊び方を教えたり、食べ物や、動物、キャラクターの形を作って子どもたちを楽しませていました。それを見ながら子どもたちも自分で型抜きをしたり、丸める、伸ばす、などして粘土遊びを楽しんでいました。カラフルな色なので、子どもたちのほとんどが抵抗なく遊ぶことができ、親子で粘土の感触を楽しんでいただけたようでした。「うちの子食べちゃいました。」「食べたけど塩辛いのですぐに吐きだしました。」などの報告もありましたが、粘土遊びを楽しんでいるお子さんを見守るお母さんは皆さん笑顔でした。

2019 年度事業計画の方向性

チャイルドエデュケア研究所では、2019年度テーマを「子どもが生き生きと育つための環境や保育者の関わり方」としました。テーマに沿ったセミナー・講演会等の開催を通じて、地域の保育者や子育て家庭、学生、卒業生を対象とした研修の機会を提供し、地域とのつながりを重視した事業を展開していきます。

夏のセミナー

■ 公　演：鈴木翼氏　「鈴木翼のあそびうた講習会」
■ 分科会：子どもが生き生きと育つための環境や保育者の関わり方
■ 日　時：2019年6月23日（日）9:30〜13:00
■ 場　所：桜花学園大学・名古屋短期大学

冬の講演会

■ 講　演：浜谷直人氏　首都大学東京人文科学研究科　教授
■ 演　題：「多様性がいきる保育：仲間と共に自己肯定感が育つ」
■ 日　時：2019年12月8日（日）13:30〜15:00
■ 場　所：桜花学園大学・名古屋短期大学

その他、子育て交流会・開放日なども、今年度同様実施いたします。

編集後記

本年度より、チャイルドエデュケア研究所として新たな1歩を踏み出しました。子育て研究所の頃にスタートした子育て交流室も16年目になります。交流室に通ってくれた子ども達は、もうすぐ20歳を迎える頃でしょう。今年、交流室に参加して下さったおおよそ1000名の親子の皆さんにとっても、緑のある広いキャンパスで遊んだ豊かな時間が、それぞれの未来へのエネルギーになることを願っております。

また、夏のセミナー、冬の講演会は、地域の保育を担う保育者・研究者の皆様にとって、自己を見つめ直す意義ある機会になるようなものをという視点で企画しております。年度末の活動を締めくくる年報は「探求心」をテーマにした論考と報告を多くの方に語ってもらうことをお願いしたうえで、ご寄稿賜りました。研究者や実践者だけでなく、地域の皆様、そして子育て世代である一人でも多くの皆様に、今ある子育ての環境や教育について立ち止まって考えて頂けるような読みやすい冊子になることを目指して、さらに短く読みやすいページになるように編集致しました。

今後も、キャンパスに関わる多くの研究者、実践者、そして親子が生き生きと活動できる環境に近づけるよう、チャイルドエデュケア研究所の活動を続けて参りますので、来年度もどうぞ宜しくお願い申し上げます。

編集者　小柳津和博　高須裕美

【2018年度　研究所役員体制】

●チャイルドエデュケア研究所　所長　太田早津美
●チャイルドエデュケア研究所　副所長　高須裕美
●事務局員　本多美須子
●主任研究員　神谷妃登美　小島千恵子　布施佐代子　小柳津和博　堀由里

表紙デザイン

高田　吉朗